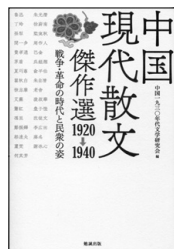


民国期文学者たちの真骨頂

——『中国現代散文傑作選』を読む

松浦 恆雄



四六判 448頁
勉誠出版
[本体4200円+税]

中国一九三〇年代文学研究会編
中国現代散文傑作選 1920-1940
戦争・革命の時代と民衆の姿

はじめに

本書の書評の前に、まず確認しておきたいことがある。それは、中国現代文学の「散文」というジャンルについてである。本書の「はじめに」にも記すように、「散文」は定義が難しい。あえて言えば、詩・小説・戯曲以外の文学作品の全てを含む。短い「小品文」も、長大な論説文も、遊記も日記も伝記も書簡も、ジャンルから言えば、すべて「散文」に属する。本書の収める「散文」のスタイルも極めて多様だ。そこでとりあえず本稿も「散文」の語をそのまま利用させていただく。

もう一つ承知しておくべきは、中国の知識人にとって散文を書くというのは、いわば知識人の証しのようなもので、今日でも、中国や台湾で大学教授が詩を書いたり散文を書いたり、あまつさえそれを出版したりするのは、決して珍しいこ

とではないということである。

一、本書の作家・作品

では、本書の収める三二名の作家はどうであろうか。本書収録の散文と同時期の作品を収める代表的なアンソロジーと比較してみよう。比較の対象は、民国期をほぼ一〇年ごとに区分した以下の三種の大系である。

A: 『中国新文学大系』散文一集・二集、良友図書公司、一九三五年。

B: 『中国新文学大系(一九二七—一九三七)』散文一集・二集、上海文芸出版社、一九八六年。

C: 『中国新文学大系(一九三七—一九四九)』散文一集・二集、上海文芸出版社、一九九〇年。

本書の三二名の作家は、費孝通と朱光潜を除く、二九名の

作家が、A・B・Cのいずれかに収録されている。つまり、本書には、民国時期を代表する散文作家がしっかり選ばれていることが確認できる。

しかし、逆に言えば、あえて費孝通と朱光潜を選んだ炯眼にも注目すべきである。特に費孝通は社会学者で、その文章が文学選集に採録されることはまずない。しかも一読、その見事な行論には目を見張る。本書の手柄の一つであろう。

一方、これはアンソロジーの宿命であるが、どうしても取り残した作家が出る。筆者が寂しく思ったのは、梁遇春、許地山、張愛玲の名前がなかったことである。

次に収録作品を見る。作品は一名一作に絞り、三一名三一作、その多くが本邦初訳である。その三一作のうち四割強の一三作が、A・B・Cのいずれかに収録されている。これまた本書の採録水準の確かさを物語る。

大系は、Aが一〇巻、B・Cが二〇巻であるが、散文巻の巻数はいずれも二巻である。事実上、散文は、B・Cでは、Aよりその価値が半減させられている（無論、巻立てに変化はある）。しかし、本書三二作の執筆・出版時期を、大系A・B・Cの時期に照らして整理すると、A：七作、B：一四作、C：一〇作となる。本書では、散文が成熟し重要性を増すB・C時期の作品の収録数が倍増している。これは大系以上に、散

文選択の妥当性、的確さを示すものと言えよう。

二、本書の構成

本書の構成に移ろう。本書はⅠ「革命・時代」、Ⅱ「旅・異郷」、Ⅲ「故郷・民衆」、Ⅳ「家族・生命」の四部構成となっている（便宜上Ⅰ～Ⅳの数字を付す）。この構成を良く見てみると、Ⅳ家族（血縁世界）→Ⅲ故郷（地縁世界）→Ⅱ異郷（外部世界）→Ⅰ革命（国家社会）というふうに、人間にとって最も身近な家族から、人間関係の輪が次第に広がり、最も外部にある国家・社会に至るといふ儒教的秩序を擬した構成になっている。編者は、このような編集が、中国人の散文にふさわしいと判断したのであろう。事実、ⅣからⅠへと移る人間関係の親疎が、概ね収録作品数にも反映している（Ⅰ：六、Ⅱ：八、Ⅲ：九、Ⅳ：八）。ただし、この四部構成には、以下のような微調整が必要ではないかと愚考する。

・ 矛盾「故郷雜記」は、故郷の人々を写すため、ⅠからⅢへ移動。

・ 瞿秋白「赤色ロシアからの帰途」は、革命の時代精神を反映するため、ⅡからⅠへ移動。

・ 徐蔚南「山陰道上」は、異郷である浙江紹興を描くため、ⅢからⅡへ移動。

・ 巴金「エルケの灯火」は、姉の死を扱うため、ⅢからⅣ

へ移動。

以上の修正を加えると、収録作品数は、I・二六、II・八、III・八、IV・九、となる。

三、散文のスタイル

散文のスタイルは、しばしばテーマと密着した多様性を持つ。以下に各篇ごとに付された訳者の「解説」に言及されているスタイルを挙げる。一部、翻訳された散文自体からの引用も含む。

・魯迅に代表される論争的な散文のスタイル「雑文」の系譜（下出鉄男・聞一多）。

・「新聞記者的」な報告文体（佐治俊彦・瞿秋白）。

・その率直さ、小説らしい構成のなさ、自伝と言ってもよい散文化（佐治俊彦・艾蕪）。

・伝統的な詠物詩の系譜（白井重範・鄭振鐸）。

・抒情的散文のために新たな表現の可能性を切り拓いた実

験作（佐藤普美子・何其芳）。

・中国の白話文学は（中略）徐志摩と秋心の両名が白話文学の駢儷体の長所をよく示している（廃名・佐藤訳）。

以上をまとめ、さらに本書の収録作品中、同じスタイルに属すると思われる作品も加えると以下のようになる。

① 雑文・聞一多「儒・道・土匪について」・丁玲「国際女性デー

に思う」。

② 報告文体・瞿秋白（前出）。

③ 自伝・艾蕪「茅草地にて」・郁達夫「還郷記」。

④ 詠物詩・鄭振鐸「海燕」・夏丏尊「日本の障子」・豊子愷「おたまじゃくし」。

⑤ 抒情的散文・何其芳「弦」。

⑥ 駢儷体・徐志摩「我が心のケンブリッジ」。

④ 詠物詩は散文の対象、⑥ 駢儷体は文体そのものの特徴を指し、散文のスタイルとは少し異なるが、ひとまずここに入れさせていただく。「解説」では触れられていないが、本書の収録作品には、以下のようなスタイルを持つものも含まれている。

⑦ 遊記・茅盾・徐蔚南（ともに前出）。

⑧ 書簡体・朱光潜「人生と自分について」。

⑨ 論説体・費孝通「復讐は勇に非ず」。

⑩ 伝記・老舍「私の母」。

⑪ 追悼文・魯迅「劉和珍君を記念する」、廃名「秋心（梁遇春君）を悼む」。

⑫ 小品文・梁実秋「雅舍」。

以上のように、本書の収める散文のスタイルは極めて多彩で、散文の魅力を十二分に引き出す編集となっている。これ

も本書の手柄に数え上げて良いだろう。

ただ、本書には、日記や読書記、特に滋味豊かな読書記のスタイルが収録されていないのが惜しまれる。これも紙幅上やむを得なかったであろう。

また、一般には小説と認められるものが、本書では、散文として収録されている(艾蕪(前出)、呉組細「薪」)。中国では、小説と散文の境界は曖昧である。朱自清「笑いの歴史」が散文と見なされたり、小説と評されたりする。しかもこのような例は決して珍しくない。小説が持つ記実性の高さが、また、それをほとんど疑わない作者・読者の意識が、この曖昧さを再生産し続けている。これには歴史的(小説は歴史資料)、現代的(読者に現実を認識させる)要因が根深く絡み合い、このフレームから抜け出すのはなかなか容易ではない。

四、散文のキーワード

現代散文の多様なスタイルが紡ぎだす世界には、独特の風合いを勝ち得ているものが少なくない。つとに日本に紹介されている周作人や豊子愷などは、その筆頭に数え上げられよう。今回は、この二人以外の逸品をキーワードにより拾いだしてみよう。

一つ目は「伯父さんの話」。この語は、ウィリアム・サロウヤン「僕の名はアラム」(新潮文庫、二〇一六年)の柴田元幸「訳者あとがき」に見える。「夢想家だったり怠け者だったり、あつちへふらふらこつちへふらふら、世の中と致命的にずれている(しかし本人は平気な顔をしている)」「(二四四頁)が、子供たちには、たまらなく魅力的な、そんな伯父さんのことを記した話である。

新刊 老舎北京語辞典

山田忠司 編 ■ B6変型判 / 164頁 / 3400円

《駱駝祥子》《四世同堂》《茶馆》など老舎の60作品より北京語語彙約1500語を採集、その発音、語釈、用例、用例の出典、用例の日本語訳を示した。日本で出版されている中国語辞書に未収録の語彙も多数収録し、老舎作品および北京語で書かれた作品を原文で読む際に有用。

2016年

上海出版
翻促進計劃

入選書!

方言と中国文化

第2版

周振鶴・游汝傑 著 内田慶市・沈国威 監訳
岩本真理・大石敏之・瀬戸口律子・竹内誠・原瀬隆司 訳
■ A5判 / 336頁 / 3000円

光生館 〒112-0012 東京都文京区
大塚 3-11-2 音羽ビル7F
TEL.03-3943-3335 FAX.03-3943-3494
http://www.koseikan.co.jp <価格は税別>

「伯父さんの話」は、中国現代文学でも脈々として書き継がれている。魯迅「白光」（モデルが大叔父）から王安憶「叔父さんの物語」、閻連科「伯父の一家」「私の叔父」まで。ただ、多くは歴史の深刻さにまみれている。そんななか、飄々とした味わいを保ち、本来の「伯父さんの話」の面目を伝えるのが、李広田「花鳥おじさん」である。美しい鳥の鳴き声がすると空を仰ぎ、いつまでもその行方を追っていたり、庭の榆の木に営巢したカササギを家族扱いして、榆の木なぞ売り払えと言う祖母の言葉に、まるで耳を貸さなかったり（三八〇、三八一頁）。こんな胡乱で心優しい叔父さんが、現代中国文学にもいてくれて、本当に良かったと思う。

二つ目は「死」である。本書収録作品のうち、何らかの形で「死」に言及するものは、魯迅、孫犁、蕭紅、馮至、周作人、巴金、老舍、凌叔華、沈從文、廢名、謝冰心の一作に及び、全体の約三分の一が「死」によって占められている。これは、人が「孤独」に向き合うとき、好んで内なる声を発することと関わるだろう。「死」を前にして、人は「忘れがたいものを忘れ難いがゆえに記す」（蕭紅『呼蘭河伝』）。散文にとって、死は、極めて重要なテーマである。今、廢名のみを取り上げる。

廢名（前出）は、年若い友人・梁遇春の夭逝を悼む。廢名は、

彼を根っからの詩人だと評しながら、書いているのは散文だと言い、その作風は、白話文学における駢儷体の六朝文だという。こんな自己撞着が許されるのは、廢名の筆だけだろう。こんなエピソードも紹介される。廢名が彼の文章を絶賛すると、彼は他愛もなく大喜びしたという。その文章とは、飛行機事故で早世した徐志摩の追悼文だった。彼は、徐志摩が人からタバコの火をもらおうとき、Kissing The Fireと言ったと記す。たまゆらの生のメタファが、徐志摩から梁遇春へと引き継がれた瞬間だ。廢名の仕組む生と死のコントラストに、読者は思わず息を呑む。

以上、本書は、読むほどに興味の尽きることがない。これまで中国の現代文学など読んだことのない方にこそ是非手に取り、味わっていただきたい一冊である。

（まつうら・つねお 大阪市立大学）